

鎌倉市立御成小学校

研究テーマ：話を聴き、深く考え、表現する子

1、実践の目的

【研究仮説】

- ① 友達の意見やいろいろな人の話を聞く
- ② 聞いたことを自分の考えと比較したり取り入れたりすることで、深く考える、考えを広げる
- ③ 考えたことを伝える、表現する（アウトプット）

このような「聞く」「考える」「表現する」の繰り返しによって、聞く力、深く考える力が育つであろうと考えた。

【研究の経過】

〔2020年度〕

コロナ禍で授業研究が行えなかったため、土台作りとして「物の環境」「人の環境」「板書・ノート指導」について学校全体で共通理解し、各クラスで子どもたちが学習に取り組みやすい落ち着いた環境をつくった。

〔2021年度〕

教科指定無しだが、生活・総合が中心。

成果

- ・「目指す姿 系統表」の作成と共通理解
- ・総合・生活の単元構想図、総合の全体計画の見直し

課題

- ・十分に子どもの「聴く力」が育ったとは言えない。研究仮説を見直し、アプローチの方法を変えていく必要がある。
- ・聴き方の「形」の指導になっていたのではないか。もっと子どもが聴きたくなる、表現したくなるような環境を作ること考え、

授業を工夫していく。子どもが主体的に取り組むための教材研究・授業研究が必要である。

2、実践の内容

〔2022年度の進め方〕

- ・テーマに迫るための、あらゆる教科で授業の工夫、授業改善
- ・研究授業は生活・総合。今までの日々の授業改善によって育った（育てている）子どもの姿を見せる。

（1）校内研究の体制

研究部9名（うち、研究推進メンバー4名）を中心に、研究の全体計画・提案をしてきた。グループ会議以外でも必要があれば会議をもち、たとえ年度途中でも必要によって校内研究の進め方や方法を見直し、全職員で取り組もうという意識を常にもってきた。

授業研究の協議会も、話し合いのメンバーがいつも同じにならないようメンバーを入れ替えたり、協議会シートを変えたりすることで、研究が深められるようにした。

（2）校内研修会の様子

校内研究の場と関連付けて、御成中学校ブロックの3校の職員が一堂に集まり、早稲田大学の小林宏己先生から『主体的に学習に取り組む態度』をどのようにとらえるか』の講義をいただいた。これは、中学校で改めて「主体的に学習に取り組む態度」の評価の方法についてお話を伺いたいとの希望があったためである。小学校としても、発達段階から「主体性」の高い子が多く見られる中で、授業者がそれをどのように見取り、評

価していくのかということは話題に挙がる
ことがあった。同じ中学校ブロックの3校
で同じ話を伺えたことで、めざす子どもの
姿をすり合わせたり、小中それぞれでの現
状を伝えあったりする機会となった。

(3) 研究授業、研究協議の様子

早稲田大学の小林先生を講師としてお招
きし、年6回の授業研究および協議会を行
った。

初めの4回は昨年度の方法と同じやり方
で授業研究および協議会を行ってきた。協
議会は指導案形式で行った。授業内で感じ
た成果を赤い付箋に、課題を青い付箋に記
入し、それを拡大された指導案に貼ってい
くことで、1時間の流れで授業を見ていっ
た。最後の2回は「聴く」に特化した指導
案、協議会の方法で授業研究を行った。具
体的には、①話を聴いて感想や考えをもつ、質
問する場面、②友だちの意見を聴き合う(話
し合う)場面、③色々な意見をまとめる場面
のいずれかを授業内で設定し、指導案の中
に「聴く」の重点場面として示した。そう
することで、授業者にとっては「聴く」こと
を意識して授業することができ、参観者にと
っては「聴く」ポイントを絞って見ることに
より協議会で話がそれることがなく進める
ことができた。今後の継続課題ではあるが、
このやり方の良いところを生かして来年度
の研究につなげていきたい。

3、実践の成果

(1) 「めざす子どもの姿」の共有

全クラスに、「めざす子どもの姿」を掲示
することで、授業者も子どもたちも6年生
(ゴール)の姿を理解することができた。さ
らに、「聴く」「考える」「表現する」のめ
ざす姿を低・中・高に分けて示すことで、全
クラスが同じ視点で授業に取り組むことが

できると考えた。現在では、「聴く」にポイン
トを絞った「めざす姿」を作成中である。授
業者(参観者も)は、どんな姿が見られるよ
うになったら子どもたちが聴いていたと評
価できるのか把握できると考える。

(2) 単元構想図

1年間の活動を見通し、どういう子ども
に育てたいのか考える手立てとして、「単元
構想図」を全学年で作成した。年度初め(あ
るいは学期初め)などに、どのように進めて
いくのか学年で話し合い、その活動をする
ことでどのような子どもを育てたいのか考
えることができた。

また、各学期末には単元構想図を見直す
機会を設定し、これまでの活動を振り返っ
たり、今後の展開を修正したりした。前に作
成した単元構想図に上書きするのではなく、
「〇月〇日版」のように新しくしたものを
年度内にいくつも保存していく方法とした。
そうすることで、どのような変化があった
のか、なぜそのように変化したのか見て分
かるようになった。現在では、これまでの単
元構想図に「聴く」を育てる場面を載せ、総
合的な学習の時間の流れと「聴く」力の育ち
と両方が1つの図で見られるようにした。

4、今後の展開

今年度途中で、研究の重点を「聴く」こと
に絞ったことで、研究部のメンバーをはじ
め、全職員で共通の認識をもつことができ
た。この成果を生かして、系統性をもってど
の学年でも、6年生での「聴く」のゴールを
めざして指導していくことができると考え
ている。「聴く」ことができるようになった
子が増えることで、日常生活での友だち関
係や学校全体の雰囲気良くなっていくこ
とを強く願っている。